

## 【主題】場面緘黙の改善を目指した支援事例について

### 【副題】具体的な支援とその経過

【学校・団体名】 長野県若槻養護学校

【役職名・氏名】 教諭 津瀬 直彦

#### 1. 研究のねらい

本校は病弱を対象とした特別支援学校であり、主に慢性疾患のある児童生徒を対象とした教育を担ってきた。しかし近年、自閉症スペクトラムやADHDなどの発達障害に起因する不適応からいじめや不登校を経験した児童生徒が増加しており、以前とその実態が変化している。そのような児童生徒の中には、入学当初に場面緘黙もしくは緘黙傾向の状態であるケースが多くみられ、その支援は本校における課題となっている。

場面緘黙(選択性緘黙)とは、DSM-5の診断基準では、「他の状況で話しているにもかかわらず、話すことが期待されている特定の社会的状況において、話すことが一貫してできない」と記されている。「他の状況では話しているにもかかわらず」という部分にもあるように、話せないわけではないという前提がある。また、場面緘黙は不安症に分類され、「不安や恐怖によって話したくても話せない」状態であると考えられている。他の教師や筆者の経験として、緘黙状態の改善・克服がみられたケースでは、学校生活に慣れ、次第に笑顔が多くなり、笑い声が漏れ、声を出せるようになったり、教師との信頼関係が深まってきて、一言二言小さな声で話し始めたりするなどのパターンが思い当たる。しかしながら、場面緘黙の改善・克服に焦点を当てて行われた具体的な支援事例は少なく、どのような支援が行われた上で改善されたのか、自立活動の実践例として整理、蓄積されていく必要がある。

そこで、本研究では場面緘黙の改善に焦点を当てた本校での支援事例について、具体的な方法とその経過を紹介する。

#### 2. 研究の方法と経過

##### (1)対象生

中学部の男子生徒1名であった。家庭では話すことができるが、学校では話すことが難しい状態であった。学校生活の様子は、毎日学校に登校し授業に時間いっぱい取り組むことができた。普段の様子からは、他の生徒や教師とのコミュニケーションで過度な不安や緊張は感じられないが、部集会や全校の委員会活動など

の大きな集団への参加や慣れない場面では、不安や緊張が高まるようで、体が硬直したり教師からのかわりを拒んだりする時があった。コミュニケーションについては、自らのアバターのような役割で両手でカエル君をつくってやり取りをしていた。カエル君を縦に振ったり横に振ったりしてYes/Noを表現したり、時にはカエル君ではなく○のサインを手で作って返答することもあった。また、筆談でのコミュニケーションも可能であり、紙やホワイトボード、電子メモなどを活用していた。教師とは上記のような方法でコミュニケーションを図ることができ、同級生や小学部の関わりのあった相手であれば、同様にコミュニケーションをとることができた。また、学校で話せないことについて、教師や友だちと話せるようになりたいという思いがあり、本校に入学してから緘黙改善の相談のため、長野大学の専門家のもとに本人と保護者で通い、助言を受けていた。

##### (2)支援方法

ICレコーダー(写真1)を使用して、自分の声を録音し教師や生徒がそれを学校で聞くという方法で行われた。また、それを行った際の日付と相手(人)、場所、活動、不安レベルを自己評価シートに記入した。自己評価シートの活動の欄には、教師や生徒か



写真1. 実際に使われたICレコーダー。

らの質問及び質問に対する本人の回答が記された。不安レベルは、1らくちん/2ふつう/3すこし怖い・緊張/4かなり怖い・緊張/5ものすごく怖い・緊張の5段階であった。支援の状況把握や次の段階への移行については、保護者と本人が定期的に長野大学へ相談に行き、方向性を決め、それを学校と共有しつつ実践された。本実践は、2020年9月から2021年12月現在まで継続して行われた。

日付	人	場所	活動(状況の説明)	不安レベル*
10/12	(12)(12)(12)	学校(12)	大きな集会(12)の準備 ママコットの練習	3.0 4
10/19	(12)12	11	大きな集会の準備 ママコットの練習(12)の練習 山田先生の講話	2.9 3
10/20	(12)(12)12		2020年度小委員会(12)の準備	3.2 4 3

写真2. 実際に使われた自己評価シートの記入例。

### (3) 支援の経過

**課題1** 自宅で IC レコーダーに録音したダジャレを、担任の教師2人が聞くことからスタートすることとした。

支援Ⅰ：声を出せる場所を学校に近づける(2020年9月～2021年4月)

自宅でダジャレを録音し、学校で担任が誰にも聞かれない場所で聞くことから始めた。録音する場所を学校へ近づけるタイミングは、保護者の方で毎回の練習の不安レベルを見つつ、本人と相談の上で決められた。声を聞かせる回数を重ねるにつれて不安レベルが下がり、録音の場所が、自宅→自宅の玄関→出発前の車内→自宅から少し走ったお店の駐車場などと声を出せる場所が少しずつ学校に近づいた。録音場所の経過について、表1に自宅と学校のおよそ中間地点Aと学校の直前地点であるB、学校駐車場の4地点において録音を始めた日を示した。

#### 学校での対応

①感想を伝える。録音してきたダジャレについて、「面白いね、よく考えつくね」など毎回感想や簡単な質問を本人に伝えるようにした。教師が聞いた確認という意味と、なるべく自然なやりとりになるように「今日のダジャレは意外とシンプルだけど、どうしたの？」などの質問も意識して行った。声を聞いてもらうことに慣れると、質問に対し手をつくったカエル君で返事をしたり、笑顔を見せたりする時もあり、教師が聞くだけから声を聞いたことに起因したコミュニケーションへと繋がった。

②地図で現在の距離を確認。自宅から学校までの地図を用意し、今どこまで学校に近づいているかを確認した。本人と一緒に今録音している(声を出している)場所を確認し、「2学期中には〇〇まで近づけることはどう？」などと相談しながら今後の目標地点を考える時間になった。その際、本人の様子からその場で答えを出すことが難しそうだったので、考える時間を数日与えた上で、どのあたりまでを目標にするかを決めることにした。後日、地図を一緒に見ながら、聞いてみると保護者の方と家で一緒に考えてきたようで、2学期中の目標地点だけでなく、3学期中の目標地点も自分で考えて決めることができた。

表1. 録音場所と録音開始日。

	家	A	B	学校の駐車場
開始日	9月11日	11月25日	12月7日	4月14日

③今後学校で声を出すとしたら良さそうな場所と一緒に学校中を歩いて探す。今後、学校で声を出すことを見越し、相談室や図書室、保護者控室、校庭にある昔の校長住宅など候補となる場所を実際に見て回った。ここなら良いという反応はなかったが、今後、学校で声を出すことを具体的にイメージする機会にはなったようであった。

**課題2** 新年度から、担任が簡単な質問を学校駐車場で言い、それに対する回答を車内で録音し、教師がそれを少し離れた場所で聞くこととした。

支援Ⅱ：ICレコーダーを介し、担任の教師とその場でやりとりをする(2021年4月～10月)

登校時、学校の駐車場に担任が待機し、本人が車内にいる状態で、担任から簡単な質問をした。その質問に対して、車内でICレコーダーに回答を録音し、担任が少し離れたところに移動して回答を聞いた。聞いた後に本人のもとに戻り、解答に関して直接返事をした。初めは不安レベル5以上を記していたが、次の日には4.9になった。2か月程度継続して行くと、不安レベルが1.2まで下がり、保護者と相談して次のステップを相談しに行くことになった。

#### 学校での対応

①少しずつ質問の質を変える。はじめの方は、まだ不安・緊張が高い状態であったので、答えが明確で簡単な質問を心掛けた。例えば、「英語で本は？」のような質問を行った。慣れてきたところで、よりコミュニケーションの質を高められるように、本人の興味・関心を基に、恐竜の画像をiPadで見せながら「この恐竜はなんでしょう」のような質問や、昨日学校であった出来事に関連した内容を質問した。回数を重ねるごとに、こちらの質問に笑顔を見せるなど、リラックスした様子が課題を行う様子も見られるようになった。

②録音された音声を聞く場所を少しずつ近くする。担任の質問に対して、車内で録音したものを聞く際に、始めは5メートルほど離れた玄関で聴いていたが、少しずつ本人の乗っている車に近づけていった。保護者とも相談し、最終的には本人の視界に入らない車の後方で聞けるようになり、車の窓ガラスを少し開けた状態にして録音された音声本人に聞こえている状況でも行うことができた。しかし、近づくことはできたが視界に入ってしまうと、とても緊張するようだったので、本人が担任の存在を視認できる状況になると難しいようであった。

家	0 1 2 3	さん	0 1 2 3	国語	0 1 2
車の中	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	数学	0 1 2
到着到着後の車内	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	社会	0 1 2
図書室	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	理科	0 1 2
相談室	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	英語	0 1 2
校長宅	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	美術	0 1 2
中2教室	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	技術	0 1 2
体育館	0 1 2 3	先生	0 1 2 3	音楽	0 1 2

写真3. 実際に記入された不安・緊張アセスメントシート。

③学校での、場所、人、教科別の不安・緊張の具合を本人と確認した。次の支援について考える参考資料になればと考え、高木(2017)のアセスメントの観点を参考に不安・緊張評価シートを作成した(写真3)。本人の回答はほとんどを1に丸をしていたが、微妙に0より付けていたり、2より付けていたりしていたので、そのわずかな違いから読み取ることができそうだった。実際に、声を聞いてもらう人を増やしていく時や、校内で録音する際の参考資料として活用でき、この後に行った支援Ⅲの中で聞いてもらう人を増やす際の参考にすることができた。

**課題3** 長野大へ相談に行き、本人の意思もあり担任の質問から同じ学級の生徒から質問を受けて答える形に変更することとなった。また、返答についても教師と生徒に聞いてもらいたいということになった。

**支援Ⅲ：同じ学級の生徒から質問をもらい、翌日の朝に学校駐車場の車内で回答を録音、それを生徒や先生が聞く(2021年7月～12月)※10月半ばまで支援Ⅱも継続して行った。**

学級の生徒に話す練習について説明し、質問を募集した。質問の内容を忘れないように付箋に書いてもらい、それを持ち帰る形式にした。録音された回答を聞くときには、本人が教室にいない状態で教師と生徒で聞くようにした。また、聞いた内容に関しては、これまで通りに生徒と一緒に感想を伝えるようにした。

### 学校での対応

①欠席生徒が多いことによる、質問を出せない時の対策。質問を出す生徒が欠席すると、練習も滞るため、事前に質問を紙に書いてもらい、それを質問ボックスに入れる形式にした。質問ボックスは本人と教師と一緒に作り、同じ学級の生徒だけでなく教科担当の教師からも質問を募った。また質問の内容と回答についてもメモ帳に記録し、回答を聞く際にその場に居なくてもどのような回答だったかわかるようにした。

②聞いても良い人を広げる。質問ボックスを作ったことで、誰でも質問しやすい雰囲気が出た。出席状況の安定が難しい学級事情もあり、同じ学級以外の人

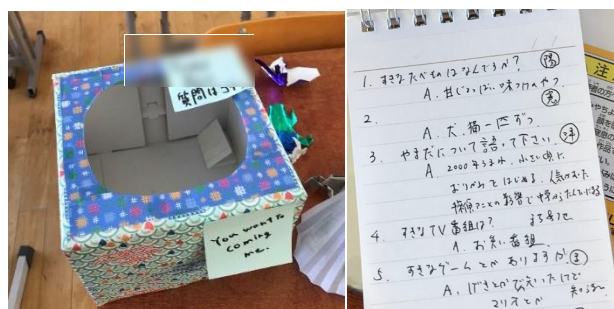


写真4. 質問ボックス(左)と質問内容と回答の記録帳(右)。

からも質問をしてもらう必要が出てきた。本人もその状況を理解していたようで、担任以外の教師や同じクラス以外の生徒にも質問を考えてもらうことができた。中学部の後輩で共通の趣味がある生徒から始め、小学部の児童にも質問を考えてもらい、回答を聞いてもらうこともできた。また、10月中旬から12月までの直近の記録の一部について表2に、不安レベルのグラフを図1に示した。

表2. 支援Ⅲにおける生徒への質問と不安レベルの記録

日付	人		活動	不安レベル	
	友達	先生		録音時	聞いてもらう時
10/18	1	1	好きな食べ物は何ですか？	3.6	4
10/19		1	家でもしペット買えるならなにを買いたい	2.9	2
10/20	2	1	山田について話してください	2.8	3.8
10/21	1	1	好きなテレビ番組はありますか	2.7	1.9
10/22		2	知っているまたは好きなアニメとゲームは？	2.6	1.9
10/25		2	中1になる娘が最近反抗期？だから知りませんが、すごく口答えしてきます。親としてどう接したらいいですか？	2.5	1.8
10/27	1	1	ITMK第二段はいつ公開予定ですか	2.4	1.7
10/28	1	1	すみっこぐらしで好きなキャラクターは？	2.3	1.6
10/29	1	1	山田の書き方教えてほしいボマ。	2.2	
11/1	1	1	最近たくさん食べてしまいます。でも太りたくありません。運動はそんなに好きですか？車は運転してみたいですか？	2.1	2.5
11/2	1	1	どうしてイニシャルdを知っているのですか？車は運転してみたいですか？	2.1	1.6
11/4	2	2	1番難しい折り紙は何の折り紙？	2	3
11/5	2	2	折り紙とは さんにとってどんな存在なのでしょう？	2	2.9
11/5	2	2	今一番大切にしたいものは何ですか	2	2.9
11/8	2	1	身長は何ミリですか	2	2.6
11/9	1	1	種類ならなにが好き？	2	1.5
11/10	1	1	もしカエルを飼うとしたら何センチの幅がいいですか？	2	1.4
11/11	1	1	カエル好きですか？ほしのげんすきですか？好きな食べ物はなんですか？	2	2.9
11/12	1	1	フルーツ作ってください	2	
11/15	1	1	好きな本を紹介してください	2	2.5
11/16	1	1	おすすめの気分がパッとなるTVを教えてください	2	2.4
11/17	1	1	最近作ったオリジナルの折り紙はなに？	1.9	4
11/18	1	1	東リベって知ってますか？	1.9	
11/19	1	1	好きな曲ってありますか	1.9	1.5
11/22	1	1	折り紙以外でこの人すごいって思うことは？	1.9	
11/24			好きな有名人は？	1.9	
11/25	1	1	好きな色ってありますか？	1.9	2.3
11/26	1	1	ペットに名前をつけるとしたら？	1.9	2.2
11/29	1	1	メガネが似合うと思う若葉の児童生徒を教えてください	1.9	2.1
11/30	1	1	家にある家電で1番役に立っていると思うものはなんですか	1.9	2.3
12/1	1	1	炎のゴブレットの見どころはなんですか？	1.9	1.5
12/2	2	1	中学部について楽しいことは何ですか	1.9	3.9
12/3	2	2	恐竜の中で1番強いのは？またその理由は？	1.8	4
12/6	2	2	あなたにとって山田とは？	1.8	4
12/7	2	2	最近のマイブームは何ですか	1.8	3
12/8	1	1	もし声真似するとしたら誰をやってみたい？	1.8	2.3

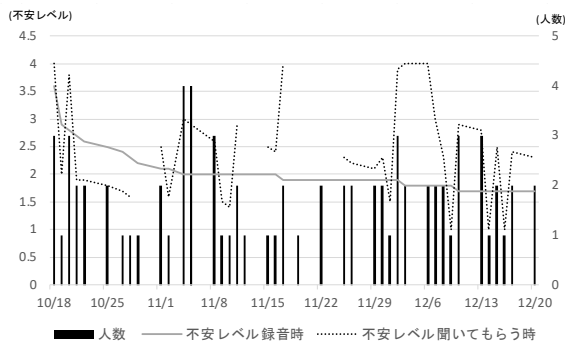


図1. 支援Ⅲにおける聞く人数と不安レベルの変化

図1より、録音時の不安レベルは緩やかに下がり、2を下回ったあたりで安定してきた。聞いてもらう時の不安レベルについて、聞いてもらう人を増やした時や、初めての人や久しぶりの人に聞いてもらう時もあり、そのような影響もあり、不安レベルが上下していると思われた。

③学校で声を出すことを母と相談。録音への不安も下がり、聞いてもらう相手も増えてきたことから、母や本人と相談し冬休み中に人の少ない校内で録音をすることにした。学校の駐車場で録音できた経験を積み重ね、聞いても良い人も増えたことが、校内での録音に踏み出す一助になったのかもしれない。

#### 支援iv：冬休み中に校内で声を出す(2021年12月)

冬休み中の人の少ない環境の中で、校内での録音を行った。方法としては、これまでと同様に、教師が簡単な質問をし、その答えを今回は校内の部屋で録音し、それを担任が本人と離れた場所で聞くというものであった。当日は9か所で録音することができ、最初にできた時は、本人が保護者に握手を求めてきたということで、達成感があったようだった。その後は、担任の提案で録音する場所を変えて試していった。

#### 学校での対応

①録音する場所を決める。保護者と事前に相談した中で、ある程度場所の検討をつけておき、はじめはその場所の中から本人と母で選んでスタートすることにした。その後の場所については、録音できた場所から近い場所を選んで、本人や保護者と相談しながら録音をしていった。普段使っている教室での声出しは難しいと考えられたが、本人と相談しながら、3回目と9回目の2回録音をした。9回目については校内各所で録音をして少し慣れたところで最後に提案した。不安レベルは3回目の6.5から6.4に下がった。

#### 3. 研究のまとめ

以上のように、場面緘黙の改善に焦点を当てた支援をしてきた。段階的に学校に近づけることや声を聞い

ても良い相手を増やすことが基本的な方向性であったと思われる。このような支援を行う中で、感じたことは大きく4点ある。

1つ目は学校への安心感である。話す練習をするには、本人に「話したい」という意欲があることが前提にあると感じる。話したいという意欲が出る段階まで、学校という場所に安心感を持てることが必要であり、それを作るのは教師との信頼関係や周りの生徒との関係性などの環境だと感じた。学校に対して安心感を持てる段階にまで達することで、自身の困難さの改善・克服へ視野が開かれていくのだろうと改めて感じた。

2つ目は、自己評価の積み重ねの効果である。「話したい」という意欲が出てくれば、前回より今回、今回より次回、と少しでも改善し目標に近づいている記録が残っていく。不安レベルの減り具合の大小も大事なことであるが、たとえ0.1であったとしても本人の中で改善したと記すことで、前に進んでいる実感、あるいはそうでありたいという思いに引張られて、次の段階へ踏み出せているように感じられた。本人の前向きな評価が、改善を見せた要因として大きいと感じる。また、自己評価をする中で不安レベルが高くなった時も、本人と支援者双方にとってその理由を考える機会になり、自らヘルプを出すことが難しい場合でも軌道修正されやすく有効だと感じた。

3つ目は、次のステップについて専門家の先生にもご協力をいただき、本人と共に方策を考えられたことである。緘黙改善への道筋として、当事者それぞれの方法があると思われる。本実践では、相談しながら本人の意思に沿った方法が決められたことも、前向きに自身の課題に向き合うことができた1つの大きな要因であったと思われた。

4つ目は、保護者の方のサポートである。本実践は学校だけでなく、保護者による専門家の先生と学校をつなぐやりとりをはじめ、家庭での自己評価シートの記入や録音作業が行われた。当事者の最も身近なサポーターとして保護者の存在が大きかったと感じた。

#### 4. 参考資料

- ・高木潤野(2017)「学校における場面緘黙への対応—合理的配慮から支援計画作成まで」学苑社。

#### 5. 謝辞

本実践を行う上で、ご協力を賜りました本人と保護者の方、若槻養護学校中学部の先生方、長野大学の高木潤野先生に記して感謝申し上げます。